

講演Ⅱ

知は力なり？ — 社会と子供が科学技術を使いこなすためには

佐倉 統（東京大学教授）

科学は、人が直観的には理解できない世界の成り立ちや仕組みについて、教えてくれる。地球が太陽の周りを回っていることや、人間も動物から進化したものであることなど、科学が少しずつ明らかにしてきた新しい世界観と人間観である。しかし、これらの科学的知識や世界観が、常に私たちを幸せにしてくれるとは限らない。科学知識を「使いこなす」ための方法を身に付けることが必要である。

17世紀にフランシス・ベーコンは「知は力なり」と宣言し、デカルトらとともに近代科学の幕開きを先導した。それに続く啓蒙主義の時代は、知識が増えることで人類の理性が自然を管理し、理想の社会が実現すると考えていた。たしかに科学の知識は、それまで思いもつかなかった新しい世界を見せてくれた。

だが、それから400年近くが経ち、知識の量と、それがもつ社会的な意味は大きく変わった。科学的知識は、直接私たちの人生や生活を有益なものにしてくれるとは限らない。知識は、特定の状況や文脈に埋め込まれた形で存在するからだ（ダナ・ハラウェイの「埋め込まれた

知識 embedded knowledge」）。たとえば、イエール大学での実験によれば、心理的な現象を説明する文章に脳科学関連の用語を織り込むと、内容が不適切であっても、読者は説明文として優れていると判断したことが報告されている。科学的知識は、ときには理解を妨げるノイズとして作用することもあるのだ。

科学的知識は、一定の科学的手続きに従って生産される、特異な知識である。日常生活に必要な経験知や生活知とは、その特性も様相も異なる。したがって、科学的知識を日常生活の中で使いこなすためには、どのような生活を実現し、どのような情報が必要なのかを生活者が明確に定める必要がある。専門家は、そのような生活者からの要求に応えつつ、専門的知識を適切に編集して提示する必要がある。両者を仲立ちする仲介者（インタープリター）の役割も重要である。

ここでは、科学的知識と経験知がどのように異なるかを明らかにし、科学的知識を生活場面で使うのに適切な形に編集する活動の実例を紹介する。



〈プロフィール〉

1960年東京生れ。東京大学大学院情報学環教授。京都大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。もともと専攻は進化生物学だが、最近は科学技術社会論が専門領域。人類進化の観点から人間の科学技術を定位するのが根本の興味である。3.11以降は放射能汚染をめぐる科学技術と社会の関係について研究している。主な著書に、『おはようからおやすみまでの科学』（ちくまプリマー新書）、『進化論という考えかた』（講談社現代新書）、『科学の横道』（中公新書）、『「便利」は人を不幸にする』（新潮選書）など。

座長

宮下孝広（白百合女子大学教授）

1956年生まれ。白百合女子大学文学部教授、児童文化学科長・発達心理学専攻主任。日本子ども学会常任理事・編集委員長。調布市社会教育委員。東京大学大学院教育学研究科博士課程中退、東京大学教育学部助手、白百合女子大学文学部専任講師・助教授を経て、現在に至る。専門は発達心理学、教育方法学。小学校での授業研究の傍ら、PTA活動・地域活動にも参加。『新版 発達心理学への招待』（共著、ミネルヴァ書房）、『教育の方法と技術 第2版』（共著、学文社）などがある。

